

目的 食物の嗜好について第1報で、年代差、性差による嗜好のちがひ、および親子あつた夫婦間の嗜好の相関について報告したが、本報では、嗜好における食物間の関連性および、食物の嗜好評価の要因について調べた結果を報告する。

方法 40種の食物について、当短大生50名とその母親を対象とし、Hedonic Scaleの5点法により嗜好度を調べた。その評価の要因として、直接食物の嗜好に関係する、味、香り、外観、テクスチャーの4種に、更に栄養、習慣、心理の3種を加へ計7種の中から、嗜好評価に最も関与する順に1, 2, 3と順位をつけさせた。

結果 40種の食物に対する嗜好は前報同様、短大生群は和洋中華風型であり、母親群は和風一辺倒型であった。その嗜好評価で、特に真および肉を素材とする食物に対して、両群とも嗜好度の標準偏差値が他の食物に比し大で、嗜好のバラツキが同立つので、更に関与する食物3種、肉のもの4種を選び出し、それらの嗜好の相関行列を求めた。それによつて短大生群と母親群とはかなり異なり、特に短大生群では真料理と肉料理との間に全く相関関係が認められなかったが、真料理間、肉料理間にはそれぞれ有意に相関がみられた。すなわち、短大生群では真も肉も好む人は非常に少なく、しかも真料理に対する嗜好度が特に低いこと等から、肉料理一辺倒の人かかなり多いことが考えられた。その他の食物間の相関については検討中である。次に嗜好評価の要因について、40種の食物の総計では、両群はほとんど同じで、嗜好評価“好ま”の場合、味、香、外観、テクスチャー、栄養、習慣、心理の順に約40%、14%、11%、12%、10%、1%、13%、67%、67%の割合の貢献度であった。“嫌”では味と心理が大であった。